
Messiah of Magician

武柴 敦斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

M e s s i a h o f M a g i c i a n

【Nコード】

N 3 8 5 5 Z

【作者名】

武柴 敦斗

【あらすじ】

授業以外に勉強する必要がないくらいのが天才主人公は、勉強以外
はまるでだめだった
それでも楽しく毎日を過ごしていた

あの日・・・神社に行くまでは……

第1話：日常（前書き）

私の処女作ですので、まだまだ拙い文章ですが、よろしく願います

第1話：日常

夏が終わり、中学三年生は受験勉強のために部活を引退した

だが俺、小鳥遊^{たかなしそら} 天はこの肌寒い季節になっても、毎日文芸部の部屋に顔を出している

俺は、一年からずっと文芸部に所属していて、文才もそこそこあるほうだ

二年の時には、『天空の人ラキュタ』を書き上げた

俺は最近聞いたんだが、先生がいつの間にか小説投稿サイトに投稿していて、かなり有名になっているらしい

出版の話をもちかけられたが、もちろん断った
あまり目立ちたくないのだ

そして今俺は、暇つぶs・・・じゃなく活動として『ソラ文字』なるものを作っていて、周りにはこれが完成したら引退すると言っている

もちろん引退する気はないが

「勉強しろよ」とは言われるものの、正直する気はない
というかする必要が無い

勉強をしなくても、授業さえしっかり聞いていれば覚えられるから
自分で言うのもなんだが、多分俺は天才なんだと思う

ただ、勉強に関してだけだ！

運動はもちろんの事、芸術や歌、ゲームなどの遊びに至るまで、勉強以外はまるで才能がないのだ

例を挙げると、50m走が9、8秒だったり

犬の絵を描いたのに、先生に「真面目に描いて下さい、今は動物の絵を描く時間ですよ！蛇口を描いてどうするんですか！」と怒られたりと、言い出したらきりが無い

そして今日も、一日が始まった

教室に入り、真ん中の列の一番前という最悪の席に着く

俺は運が悪く、くじで席を決めると必ず一番前の列なのだ

（隣があの人じゃなかったら・・・キレてるな）

毎朝席に着くたびにそう思っている

あの人が誰とは言えない

いつも通りのことを考えていると

「ソラおはよう」

蓮れんの声がした

十六夜いざよひ 蓮れん、俺の中一の時から友人だ

こいつと、隣のクラスの黒金^{くろがね} 隼人^{はやと}とは仲がいい
二人とも数少ない俺の友人だ

小学校の頃からあまり目立たない俺は、友達といえる人が少ない
それに蓮と隼人は同じ小学校なのだが、俺だけ違うから登下校は別々だ

「おはよう」と返事をする、俺たちは隼人としやべるために廊下に出た

放課はいつも廊下でしゃべっている

チャイムぎりぎりまでしゃべって、俺たちは教室に戻る

席に着くと、毎日隣の席にいるあの人に声をかけようと思う
思うだけで終わりだが

授業はノートをとるものの、成績のためだけだ
復習なんてしない
話をしっかり聞いて覚える

家で勉強する必要など俺にはないのだ

蓮と隼人にこの事を話したときは疑われたが、毎日一緒に遊んでいたら、学年順位に100番ほど差ができた
(学年全員で188人いる)

俺は普通に一桁だった
蓮、隼人は三桁だった

そんなこんなで昼休みになり、食堂は席が自由なので、三人で昼飯を取る

午後の授業が終わり、放課後になる

掃除を終わらせ、二人と少ししゃべってから文芸部の部室に向かう
俺は部活の邪魔をしないように、部室のはじめのほうに座って、『ソラ文字』の作成の続きをする

いや、ういている訳じゃないよ
むしろ尊敬されている
尊敬されているだけで、モテる訳ではないのだが

『ソラ文字』も、ワ行まで出来ているから、あとは拗音、促音、濁音、半濁音を決めれば完成だ
あと2、3日で完成だな

そんな生活を、暑さのピークが過ぎ、同級生が部活に参加しなくなってきた時期から続けている

このまま普通に高校に行き、高校でも楽しく過ごし、そこそこの大学に行って、作家とかになって、温かい家庭を築ければ、俺は死ぬときいい人生だったと思えるだろう

でも中学生のうちにあの人に・・・無理か……

俺目立たないし、あの人かわいいし・・・

普通に過ごせばいいや・・・

第1話：日常（後書き）

これから月・水・金の深夜0時に投稿予定ですので、あまり更新ス
ピードは速くありませんが、よろしくお願いします

第2話：神社（前書き）

これからも24時丁度に更新できないことが、多々あると思います
すみません

第2話：神社

ここ三日間

いつも通りの日常が過ぎていた

だがその後、久しぶりに大きな出来事があった

ずいぶんと長い時間をかけ

いつも頭の中ではそのことを考えていて

部活中は目を奪われ続けていた

だけどなかなか近づけなかった

だが遂に

『ソラ文字』が完成した

ひらがなと同じくらいすらすら書けるようになった

正直あんまり意味も、目的もない

だが、達成感が半端じゃない
虚しさも半端じゃない

だいたい、俺しか使えなかったら意味ないし

しょうがないから、未来の俺に手紙を書いてみた
内容は恥ずかしいから秘密だ

その次の日、悪いNEWSもあった

黒金 くろがね はやと 隼人とあの人と付き合っているという噂があるのだ

本人（隼人）は否定しているが・・・

確かに俺たち三人の中では隼人が一番カッコいいし、運動もできる、
面白いことも言えるし、気さくだ

でも・・・

あまり知られていないが

すごいアニメオタクだ

蓮も俺も、自分で言うのはなんだが、顔は悪くない方だと思っている

だが、オタク趣味を知られていない隼人には勝ち目がない
そしてあいつのオタク趣味は俺ら二人とその家族しか知らない

つまりはあいつには勉強以外では勝てないのだ

だから、あいつのそういう面をばらそうとしたが、友情と俺の性格のせいで、無理だった

この二つの大きな出来事が連続して起こった・・・
どう考えてもショックの方が大きかった

気休めにはなるだろう、ということ
俺は蓮と一緒に、俺の家の近くにある神社に行き、合格祈願をした
ついでに恋愛成就もした・・・あくまでもついでだ

でも、隼人は否定してたし、可能性が無いこともないか??
きっとあるはずだ
神社に来て、多少そう思えるようになった

（消えかけの達成感＋増加していく虚しさ）＋弱まった（悲しさ
＋羨ましさ）

このごちゃごちゃした感情により、やけに寒く、薄暗い帰り道に、
いつもよりゆっくりの、少しとぼとぼとした歩みを進めていた

連は単純なので、さっき

「やる気が出てきた！次のテストは負けん！」
と言って、帰っていった

鳥居をくぐろうとした瞬間

バタッ

と、後ろから音が聞こえた、どことなく怖い感じがした
こんなことならもっと速く歩けばよかった

色々考えながら振り返ったら、そこには

二匹の狛犬の、ちょうど真ん中から、狛犬（台も含めて）と同じく
らしいサイズの楕円をした青白い光が放たれていた

淡い光だが、存在感というか、威圧感というか、プレッシャーとい
うか・・・

そんなような、つい見入ってしまう何かを放つそれが宙に浮いてお
り、その前には、光から出てきたであろう女の子が倒れていた・・・

きれいな茶髪に琥珀色の目、160cmくらいの身長にスリムな体
型、つまりは貧乳・・・だが、整った顔立ち

通常の状態では出会ったら、見入ってしまったんだろう

だが今はそんなのんきなことができる状況じゃない

その女の子は倒れていて、服もボロボロなうえ、傷だらけなのだ
だが致命傷となるような傷は無いと思う・・・俺が見ただけでは判
断できない

だが、生きていることは確かだ

「・・・・・・・・て」

喋った気がするが聞き取れなかった、日本語じゃないのか？それだとどうしようもないな…

そんなことを思いながら耳を澄ましてもう一度言うよう、ジェスチャーと言葉を送る

「た・・けて・・」

多分「助けて」と言っている

病院につれていった方がいいか？

そんな酷い傷にも見えないから家に連れ帰るか？

ここからは病院も遠いので、とりあえず家につれていくことにする

母さんになんて言おうか考えながら、女の子を背負い、振動を与えないように走る

父さんは単身赴任中だ

家に着く

とりあえず中に入る

「ただいま」

：

返事がない

不審に思い机の上に目を向けると、紙が置いてある

へ明日の夜には帰れるようにするから、今日はジャーの中のご飯と

鍋のカレーをあつためて食べてね

たまにある急に旅行のパターンだ

変な誤解をされると思ったが、なんとか杞憂に終わってくれた

「うう・・・」

俺の背中から声が聞こえる

「大丈夫か？」

「ここどこよ！あんた誰よ！降ろしなさいよ！」

俺はパニックっている女の子に、神社での出来事を話す

自分の体を見て、思い出したかのように話し出す

「とりあえず、あなたが助けてくれたのね？ありがとう」

「ああ、誰でもそう思うと思うが、俺が助けたぞ」

その後、女の子の置かれている状況を話され、俺は呆然とした

そして俺は世界を救うことになりそうだ・・・

第2話：神社（後書き）

感想、アドバイス等ありましたら、書き込んでいただけると嬉しい
です

短いのは、序盤だけの予定です

第3話：出発（前書き）

拙い文章ですが、よろしくお願いします

第3話：出発

俺は聞いたことをすぐに覚えられる

今回聞いた話もほとんど完璧に理解した

だが、聞いた話のほとんどが信じられなかった

女の子が一番最初に語ったのは、どうしてあそこに倒れていたか、ということだった

彼女は、異世界から逃げ延びてきたらしい

そして、その異世界は、魔法が存在したり、魔物や魔獣がいたり、獣人やドワーフ、エルフなど色々な種族がいたり、まさにファンタジーワールドだ

さらには、彼女のいた国はその世界のほとんどを支配していた超大国だったらしい

民衆からも慕われ、平和だったそうだ

だが、神社に倒れていた日の前日の早朝、まだ真つ暗な時間に奇襲をかけられ、二日で滅んでしまったという

全員が強力な魔法を使い、高い身体能力を持っていて、機械のようなそろった動きの軍隊に攻め込まれた

そんな最強の軍隊だったが、その奇襲までまったく聞いたことがな

かったらしい

どこの国の軍隊なのか、わからなかった

そして彼女は補助魔術師で、その軍隊の猛攻を防ぎつつ山奥に避難し、間一髪のところでもこっちの世界へワープしてきたそうだ
ちなみに彼女の家系しか、こっちの世界へのワープはできないらしい

彼女が神社にいた経緯はそんなところだ

ここまででも十分信じられない
軽くパニックっていた

この世界では誰も知らないことを、俺は知っているのだ

だが話はまだ続いた
昔からあっちの世界の諺に

『困り果てたら異世界を頼れ』

という物があり

一般的には、どうしようもなくなったら、どんなものでも試してみたら意外な効果があるかもしれない

という意味だが、彼女の家などの、こっちの世界の存在を知っている一部の人は、こっちの世界の人をあっちの世界に連れてくると、特殊な能力を持つ

という意味だと思っている

これまでに自分たちで対処できない危機に陥ったことがなかったの
で、真偽は不明だが

俺はここまでの話を聞いた時点で、次に女の子が何を言うかが予想
できた

「こっちの世界に来て、一緒に軍隊と戦っていただけませんか」

俺は悩んだ

どうやって断るかを

異世界や魔法には興味を持てるが、実際行くとなると、不安要素が
多すぎる

俺はとりあえず色々質問して、断る理由を探した

「俺が断ったらどうする？」

「私を助けて下さったあなたと一緒に来てほしいのであって、誰か
を連れていけばよいというものではないのです」

「そっちの世界に行ってから、こっちの世界に帰りたくなったら帰
れるのか？」

「もちろんです」

「俺は魔法なんて使えん」

「教えるので大丈夫です」

「俺一人じゃ軍隊にはk」

「山奥に避難している同士が少なからずいますので」

「命のきけn」

「私が必ずお守りします」

・

・

・

「最初と口調違わない？」

「仕事用です」

この女の子は制服のような服を着ていて、膝上10cmくらいのスカートをはいている
ソファーに向かい合って座って、色々質問していたのだが、その間ずっと見えている

何なのかは言えないが、青と白の水玉模様だった

俺は悩んだ

今度に行くか行かないかだ

この女の子が本当に異世界からこの世界にワープしてきているというのなら、俺を「絶対守る」ことが可能な魔術師である可能性もな
くはない

だが、まだ危険が多だろうし、不安だ

「悪いがやっぱり今回は断らせてもらっていいか？」
「それでは、この本をもらっていただけますか？」

「これは??あと、普通の口調でいいぞ、同い年くらいだろうし」
「わかりまs・・・わかったわ、その本は簡単な魔道書で、古代文字で書かれてるけど現代文字も添えておきますから読んでみてくd・
・読んでみて・・・」

なんか赤くなってる

「こっちの世界でも簡単な魔法なら神社でただけけど、使えそうだったから」

神社でしか使えないのは、魔法の原理が関係している
そもそも魔法とは、体内の魔力を使い、空気中のマナを集め、起こしたい事柄のイメージをマナに伝えることで発動する物だ

現実から離れている現象ほど多くのマナを必要とし、多くのマナを集め、イメージを伝えるには、多くの魔力が必要となる

そしてそのマナがこっちの世界には無く、神社などには、それに近い物があり、簡単な魔法なら使える

だいたいそんな感じだ

俺は本を開いてみた

(どっかで見たことがある字だな・・・所々読めるぞ・・・)

「この文字はそっちの世界の古代文字なんだよな?」

「そうよ」

「所々読めるんだが・・・」

この本の文字には、『ソラ文字』と一致する物があった
形は似ているが、見たことない物もあった

現代文字と照らし合わせてみると、ひらがな部分だけ一致していた
古代文字と現代文字を交互に見ながら内容を理解していく

さっき教えてもらった、魔法のことや、初心者魔法陣を書くなど
して、マナを集めておかないと、発動しないことが多い、というこ
となど、色々書いてあった

俺は神社に行くことにした

正直、魔法があると知ってから、ずっと使いたいと思っていた

神社に着き、俺は地面に魔法陣を書く

円、六芒星、四角、三角、五角形etc・・・色々な魔法陣がある
が、複雑なほどたくさんのマナを集められ、現実から離れた魔法が
使える

俺は、火を出してみた

右の掌に火の玉が浮いている

これだけでも結構疲れる、体力的には余裕なのだが、気が滅入るよ
うなそんな感じだ

「魔力は体力と同じで、使い続ければ持久力が増すから最初は、少
ししか使えないわよ」

疲れたのを悟られてしまったようだ

「あっちの世界に行けば、空気中のマナもここより濃いし、色々魔法を教えてあげるわよ？」

なんか悪徳商法みたいだな・・・仕事用の口調のままだったらこんなことにはならなかったかもしれない・・・

・

・

・

「どれくらいかかるんだ？」

「行き来は一瞬だから、あっちでどれくらい過ごすかによるわね」

「わかった。一日だけ行ってみることにする・・・それからどうするかは、また明日決める　それでいいか？」

「ええ、もちろんよ」

そうして俺は異世界に行くことになってしまった

この神社にはワープしてきたときに少しマナが入っていて、この神社からならあっちの世界へワープできるとのこと

と、色々教えてもらいながら、女の子が複雑すぎる魔法陣を書き、集中しだした

すると、さっきと同じように、狛犬の間に、楕円形の淡く、青白い

光が現れた

それをくぐり、俺は異世界へ旅立った

第3話：出発（後書き）

もしよければ、感想・アドバイスをお願いします

第4話：始動（前書き）

またまた12時をこえてしまいました

すみません

第4話：始動

神社で青白い光をくぐった俺は、祠のようなところに出た

まだ、ここでしかワープができないそうだ

結構山奥にあるので、国を襲った軍隊にいきなり出会うという危険は無いらしい

そして、近くに、生き残った仲間たちが避難している洞穴があるそうなので、そこに向かう

予定だった

こっちに着いたとたん、女の子が倒れてしまったのだ
そういえば最初に見たときも倒れてたな・・・

祠は安全だと言ってたから、下手に動くよりここにいた方がいいな

そう思い、女の子が目を覚ますまで、待つことにした
(そういえば名前聞いてないな)

そんなことを思いながら、寝顔(寝てるわけではないが)を見ていた
よく見ると本当に可愛い・・・まあ、あの人ほどではないが・

そんなしょうもないことを考えていたら、女の子が目を覚ました

「大丈夫か？」

「別に、ちょっと魔力を一気に使いすぎただけよ」

「ならよかった。ところで、ここは安全なんだよな？」

俺はこの祠の中心部から2、30mほど離れたところに、続々と集まってきた狼っぽいのが、得体の知れない化け物とかを指さして、聞いた

「この中にいる限りは、安全よ。出るときは話が別だけどね・・・」
そういうながら自分の傷を治す女の子
手をあてるだけで、細かい傷がすぐに治っていつてる

この世界の基準はわからないから、この魔法がすごいかはわからんが、この女の子が魔術師なのは確実だ

自分の体の治癒が終わった女の子に、名前を聞こうとするが
「今から洞穴まで無傷で移動するために、魔力を練るのに集中するから話しかけないで」
と言われてしまった

少し時間をおいて、無言のまま近づいてきた

ほぼゼロ距離まで近づくと

半球をした薄緑の膜が俺らを包んだ

女子とこんなにくつついたのが初めてだったから、俺は動揺し、気を紛らわすために

「これは？」

と聞きそうになったが、話しかなかった

ほぼゼロ距離のまま一緒に歩いて祠を出ると、周囲に集まっていた、化け物たちが四方八方からこっちに近づいてきたが、緑の膜よりこちにはこれないようだった

山道を15分ほど歩いた

最後のほう、少し女の子が辛そうだったが何とか洞穴にたどり着き、中にいた

獣耳や尻尾、牙や爪の付いた人や、杖を持った老人、武器を持った青年たちによって退治されていた

その際、女の子は、真っ赤になって離れていった

そんな厄介事を持ってきたというのに、俺たちはかなり歓迎された基本的に、女の子だけだったが・・・

寂しくないぞ！隣で女の子がここにいる全員、4、50人くらいから熱烈な歓迎を受けているのに、俺は4、5人から声をかけられるだけだが、別に、寂しくはないぞ！！

というかあの女の子の名前はソフィアというらしい
そう呼ばれている

ソフィア（だけ）への歓迎が落ち着いてから、俺の紹介があった

「こちらは、異世界人の・・・えーと」

「小鳥遊 天だ」

普通に名前を言うが、俺に挨拶をしてきた一部の人たち以外は、口があいたままになっていた
静かだ・・・

さっきの戦いで杖を持ち、魔法を使っていた老人が口を開いた

「異世界人、というのは、嘘でも冗談でもない、本当のことじゃ」

そういや、一部の人しか異世界の存在を知らないんだったな

「ソフィアが、異世界から召還したのじゃ」

召還？連れてこられたから召還って、イメージじゃないんだけど・・・

・
とか聞こうとしたが、声が出なかった

ソフィアもうなずく

「異世界から召還された者は、特別な能力を持つ、という言い伝えがあつての、あの軍隊に対抗するために、ソフィアに呼び出してもらつたのじゃよ」

フロール家には、特殊な魔法があるって聞いたことがあるぞそれが異世界からの召還なのか？

知らん

ソフィアすげー

などなど

色々な声があがつたが、一応信じてもらえたっぽい

「じゃが、ただの迷信、という可能性も無くは無い。現に、今は普通の人間じゃ、過ぎた期待はせぬようにな」

「あと、この者・・・ソラといったな、が奥に作った部屋を修行のため使うことが多いと思うが、可能性の為じゃ、わかってほしい」

よく考えたらこの時点で、限りなく断りにくい状況が完成してしまっている・・・

あの老人が話し終わってから、他の人たちは、一応信じてくれて、それぞれ、爪を研いだり、武器を磨いたり、稽古したりしだした

そして俺は、ソフィアに連れられ、奥の部屋に入った

俺は色々聞いてみた

あれは、召還魔法ではないが、そっちの方が信じてもらいやすい為
そうしているそう

そして、あの老人は、グラギスさんといい、ソフィアが暮らしてい
た町の町長で、なかなかの魔術師だそう

だが、あの老人は忙しいそうなので、魔法はソフィアが教えてくれ
るそう

そして、この断りにくい状況になったことは、謝ってくれた
手違いで、老人は俺が手伝ってくれるもの、として話を進めていた
という

別に断ったとしても、こっちの世界の人に恨まれるだけで、俺の生
活に影響は皆無だろう

だが、非常に日本人的な性格をしているため、断るのは気が引ける

：

：

：

「こっちの世界でよっぽどいやなことが無い限り、引き受けること
にするよ」

「じゃあ、早速魔法を教えてあげるわ」

あれっ？もうちょっと感謝される予定だったんだが・・・

・ 当たり前のことなのか？思い切った決断をしたと思ったんだが・・・

とか思ったが口にはしない

――ソフィアの魔法教室――

基礎

・魔力量は、魔法を使用して減った魔力が、回復する度に、少しずつ増えていくもの
・だからといって、一気に魔力を消費し過ぎると、ソフィアのように、気絶してしまう

つまり、弱い魔法を、たくさん使えば、気絶せず魔力量が増え、魔法も上達する
ということだろう

応用

俺には得意属性が無いという
ソフィアは補助魔法全般、老人は地属性、というように、人それぞれ向いている属性というのがある

それは、魔術師が調べれば、すぐにわかることらしいが、俺の場合はソフィアにも、老人にもわからなかった

得意属性とは、マナに起こしたい現象を伝える際、イメージを伝えるやすいものである

つまり、同じ土属性でも、土をどうにかする現象なだけで、硬くす

るのか柔らかくするのかなど、人それぞれだ

だから、得意属性がない、というのは、すべての属性、あらゆる魔法が、ある程度使いやすい、ということか、魔法が向いていないということだろう

だが、向いていなかったらあっちの世界の神社で魔法が使えるはずがないとのこと

だから天は前者である

これが、異世界人効果の一つ目だろう、ということになった

だから、魔法の練習では、様々な属性を織り交ぜることになった
多くの魔法陣を覚えないといけなくなるが、大丈夫だろう

あと、慣れれば、魔法陣は無くても使えるようになるらしい

この日は、火の玉を作る、風を起こす、水を発生させる、岩を變形させる、等

簡単な魔法を使いたかった

しかし、火の玉を作った時点で、魔力が尽きた
しかも火の玉は極小サイズだった

疲労感がハンパない

明日は一度帰るが、ソフィアが倒れてしまうから、あまり頻繁に行き来はできないな・・・

第4話：始動（後書き）

字数はこれより少し少ないくらいが平均になるようにしたいと思っています

どうでしょうか？

第5話：魔獣

昨日、魔法を使った後にあった気怠さはすっかり消え、すっきりとした目覚め

そんなことはあり得ない

気怠さは無いが、ついでに空も、太陽もない

そんな環境で、地面に布を敷いただけの簡単な布団（地面はグラギスさんが柔らかくしてくれた）から、ソフィアにたたき起こされる

そして、魔法で調理したというフワッフワなパンを食べながら、現状を説明される

明け方、小一時間前に魔獣の群れが侵攻してきたらしい

魔法で感知したソフィアとグラギスさんが、様子を見に行ったが、感知していた力より強い魔獣がいて、急いで洞穴まで戻り、数人を起こしつつ、今まで持ちこたえていたそうだ

パンを食べ終わり、これからの予定を聞く

「とりあえず、魔獣が片付くまで、祠に行くのはやめた方がいいじゃないかな・・・」

ソフィアがすまなさそうにこっちを見ている

「別に、今日中に帰れば何にも問題は無いから、気にしないでくれ」

：

：

あれ？なんかまずいこと言ったか？

「魔獣の量が異常じゃから、今、何とか耐えていんじやが・・・敵の波が途切れたときを見計らって、拠点を移動せざるを得なくなるかもしれない・・・」

今日はソフィアの回復魔法を駆使しつつ、長期戦に持ち込んでから逃げる予定だそうだ

「拠点が移動すれば、祠にも行きにくくなるし、危険も増えるわよ」
ますます行き来しにくくなったな・・・

「じゃが、今日は拠点の位置を決めたら、わしらが囿になっとなる間に祠に行ってもらってかまわんど。それがいつになるかは、全く見当も付かんがのう・・・」

今日の予定をまとめると、魔獣の侵攻が止んだら拠点を移し、その位置が決定したら、俺とソフィアの二人で祠に向かい、俺がいた世界に戻る

その後は、とりあえず俺の生活がひと段落付くまで、今の予定では中学卒業までは、神社で魔法の練習を続け、この世界に戻ってくるそして、それまでにグラギスさんたちが、仲間を見つけ、軍隊との戦闘に備えておくとのこと

「魔力量も少ないことじゃし、毎日魔法を使うのじゃよ？」

「やっぱり俺の魔力量は少ない方なのか？」

二人が大きくうなずいた

魔力量は、体力と同じように、使わないと増えない

小さい頃から魔法を使っていないと、魔力量を増やすのが辛くなる
そうだ

小さいときに運動していないと、他の人より体力が少ないのと一緒にだ

ただ、体力は落ちるが、魔力量は滅多に減らないらしい

真偽は不明だが、失われた魔法に魔力量に干渉できる魔法があるらしい
ロストマジック

それ以外で魔力量が減ることは、まずないそうだ

そして、一つしかないこの洞穴の入り口付近では
獣人10人ほどが、先頭のほう

30人くらいいる剣士たちは、軽装備の者は前に出て敵を倒し、重
装備の者は、みんなの取りこぼしを、一番後ろで確実にしとめている

俺に説明をしてから戦闘に戻った、的確な指示を出しつつ、サポートするグラギスさんや、みんなの身体強化や、治療・回復をしているソフィアは、まだ余裕があるように見えた

そんなのを続けていると、案外早く、みんなに余裕がある内に、魔獣がやってくる間隔が広くなっていった

「各自、今敵対しておる魔獣をしとめたら、移動を開始せい!!」

続々とみんな洞穴の中に入っていく、グラギスさんがたった今あけた穴から外に出ていく

グラギスさんは殿しんがりとして、最後尾で魔獣を足止めしている

4、50分歩くと、直径が300mはあるであろう巨大なクレータ1のような物が見つかった

深さも6、7mある

グラギスさんのおかげで魔獣は振り切っている

「ここでいいかの？」

みんなうなづく

「あと、当分の間、ソラとソフィアだけ別行動じゃからな」

グラギスさんがそういうと、数名の男子に睨まれた・・・ソフィアは人気だな

「気をつけるんじゃないぞ」

みんなに見送られ、祠に向かう

何事もなくたどり着けばいいが、なぜか今日は魔獣の量が異常に多い上、強力な魔獣の割合が高いそうだから、何かは起こるだろう・

20分ほど歩いたところで、予想したとおりになった・・・

狼っぽい魔獣の群れに出会ったのだ

ソフィアは、もう魔力が練ってあったらしく、敵を眠らせる魔法を発動し、走る

ソフィアほどの補助魔術師は、直接的にダメージを与える魔法以外は何でも使えるらしい

狼の群れから少し離れたところで

「やっぱり魔獣が多いみたいだから、とばすわよ」

そう言って、身体強化の魔法をかけてくれた

十分ほど走り、いつもなら死にそうになるのだが、今回はまだまだ余裕だった

今俺は、初めて運動という物を楽しく思っている

走るのが気持ちいいねっ！

そう蓮とか隼人に言いたい気分だ

そういえば、隼人とあの人って・・・

俺は思考を止めた

何てったって今は、おこじょみたいなすばしっこい魔獣から逃げてる最中だから！

今はかなりの速度で走っているため、新しい拠点を出発してから30分も経ってはいないが、祠が見えた

あと200mほどになったときだった

こけた

俺が、こけてしまった

身体能力が強化されようと、判断力、注意力はそのままだから、俺としてはしょうがない気がする

幸い、今は運動能力が強化されているから、ズテーン、とはこけなかった

トテッって感じた

しかし、こけた一瞬でおこじよは俺の目の前まで来ていた

3分ほど前に、ソフィアに言われた言葉が思い出される

「こいつの尻尾は刃物になってて、切れ味がすごいから気をつけないと死ぬわよ！」

俺は死ぬのかな？こんな世界こなきゃよかった・・・

なんてことを思いつつ必死に、こちらへ尻尾を向け、跳んでくるおこじよを避けようとするが、間に合う気がしない・・・

だめだ・・・

右手を前に出し、せめて、命だけは、と、目をつぶった

が、痛みはいつまで経っても襲ってこなかった

代わりに、前方から「うっ」とソフィアの声が聞こえた

驚いて目を開けると、目の前には、重ねた両掌におこじよの尻尾が刺さっている、ソフィアの姿があった

両手を前に出して魔法で防御しようとしたが、間に合わなかったのだろうか

「ソフィアっ!!」

自分の運動能力の低さを、15年間生きてきた中で最も憎く思った

第5話：魔獣（後書き）

おこじょ・・・ネコ目イタチ科に属する動物

別名ヤマイタチ

イギリスを含むヨーロッパ中北部、北米に生息して
いる

日本にはホンドオコジヨとエゾオコジヨが生息して

いる

(by wikipedia)

白くてちっちゃい奴です

番外編：フィリア（前書き）

かなり遅れてしまいました

この話は、ストーリーにそう大きな影響を与えるものではありませんが、無関係ではないです

番外編…フィリア

私の家系では、特殊な魔法が使えるということで、長女は、国から支援を受け、毎日を魔法の修行に費やすことになっている

そして私は長女だ

それは、私の家計に代々伝わる使命、つまり、緊急時に異世界から助けを呼ぶためだけのもので、使われた記録もない

モチベーションは当然上がらない

魔法は精神的なところが大きいから、それでは一向に上達しない
そしてまたやる気を無くす・・・

こういう悪循環が修行を始めた3歳くらいから、7歳くらいまで続いていた

怒られないようにするため、毎日指定された魔法だけは使っていたから、それなりの魔力量になっていた

しかし、私にこれではダメだと示唆するように、国に何かが起こって、おばあちゃんが何かをして、死んだ

国に起こったことが、国にとって悪いことで、おばあちゃんがそれを解決したということしか思い出せない
母に尋ねたら、記憶が消されているそうで、教えるべく時がきたら教えてくれるとのこと

ただ、なにが起こったかは思い出せないのに、私の心には『修行をしなればいけない』という使命感が強く残っていた
そして、毎日修行を積み、使える魔法の数は母に追いついた

けど、威力、スピード、正確さ、なにをとっても負けているので、私はまだまだ修行を続けていた

そんなある日、私が15歳になった年だった

私は、まだまだ母には及ばないが、攻撃魔術以外で戦えば、国単位でも結構上位に入れるのではないか？というくらいになっていた

だが、急に現れ、国に奇襲を仕掛けてきた軍隊には、足止めすらできなかった

母は、この国で一番の補助魔術師だといわれているが、その母でも動きを少し緩ませることしかできなかった

父は婿養子で、この家計の人間でないため、オールマイティな魔術師で、幅広いタイプの人間や魔獣を相手にできるが、あまりに強い相手だと、なににもできなくなる

両親や親戚一同と協力して軍隊から逃げる際、一番山奥にある祠に向かった

理由は着いたら説明すると言われたが「どっちが行くんだ？」「ソフィアだろ」

「まだ早くないか？」などという会話が聞こえてきているため、大変気になる

祠が見え、一度そこに入り説明をするが、もう一つ奥の祠に行くことを知らされてから、祠に入る

祠には魔獣が入ってこないし、軍隊は、5名ほどで編成される小隊が追ってきていたが、今は見えていない

「次の祠に着いたら、あなたが異世界に行き、一番最初に困ったときに助けてくれた人を、こっちに連れてきなさい」

こう言われたとき、これが使命だったことは昔からわかっていたが、正直、意味がわからなかった

これまでに使われたこともない、イメージトレーニングと魔力を練る練習しかしていない魔法を、この祠から次の祠に移動したら、急いで使え

そして、この国を守れ

そう言われているのだ

私はとりあえず肯定の返事をして、魔力を練り始めた

そして、次の祠に向かって走り出した

私は緊張していたし、とても不安だった

だが、ひたすら集中していた

軍隊に出会ってしまったが、親戚たちが足止めしてくれて、私と私の両親は、まだ走っていた

なんとか祠にたどり着き、私は練っていた魔力で異世界への門を開いた

そのときはもう、父も母も、軍隊に殺され、次は私だ、となったときであった

私はすぐに青白い光に飛び込み、危機一髪、命は助かった
両親の死を悲しむ間もなく、私は意識が飛んでしまった

目覚めたとき、私は、イケメンとは言えないが、そこそこカッコいい男の背中におぶられていた

恥ずかしさやら悲しさやら驚きやら安堵やら

様々な感情が一度に襲ってきて、パニックってしまった

そこから私はこの男を説得し、連れ帰る

母に言われたこともあるが、私自身、こいつがいいと思った

べ、別に好きとか、そういうのじゃないんだからね！

帰ってきて祠に出ると、思うと悲しくなったが、また、そんなことを思う前に意識が飛んでしまった

起きたら周りには魔獣が大量にいて、私が魔法で障壁を作って、みんながいると教えられた洞穴に向かう

そういえば

起きた瞬間にあいつがこっちを見てた気がするんだけど気のせいかな

歩き慣れた山道を歩き、洞穴に着くと、集中力が切れてこいつとくつついてたのに気づき、恥ずかしくて死ぬかと思った

いやだった訳じゃないけど、恥ずかしかった・・・

それと同時に、父も母も叔父も叔母ももういないことを思いだし、

一気に悲しくなった

みんなの歓迎が無かったら心が折れていたと思う

あとこいつはソラという名前らしい

ソラと一緒にもう一回あっちの世界に行くことになったときは、正直嬉しかった

自分の感情がよくわからないけど、ソラといると楽しいし、明るい気分になれる

でもソラはまだ弱すぎる

属性はすごいことになってるけど、魔力量がある意味すごい

魔法を使ったことがない一般人より少ないと思う

しかも、身体強化をかけてあげてるのに、魔獣から逃げてる最中なのに
こけた

私も予想できなかったし、もう魔力があんまり残ってなかったから、攻撃を防ぐのに魔法が使えなかった

でも勝手に体は動いた

守りたかったから、守れてよかった

でも、今この魔獣を倒すのに魔法を使うと、手に開いたこれだけの大きな穴を治療するのが難しくなるかもしれない

どうしよう・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3855z/>

Messiah of Magician

2011年12月24日01時58分発行